淨瑠璃雑考（一）

――書かてものこと――

秋葉芳美

書かでものことながら、大西さんからの御下命で、淨瑠璃に關する雜考について書いてみる。われながら片々たるもので、お恥しいが、關心を持たれる人には參考の一資料たり得るかと思ふ。

近松半二の歿年

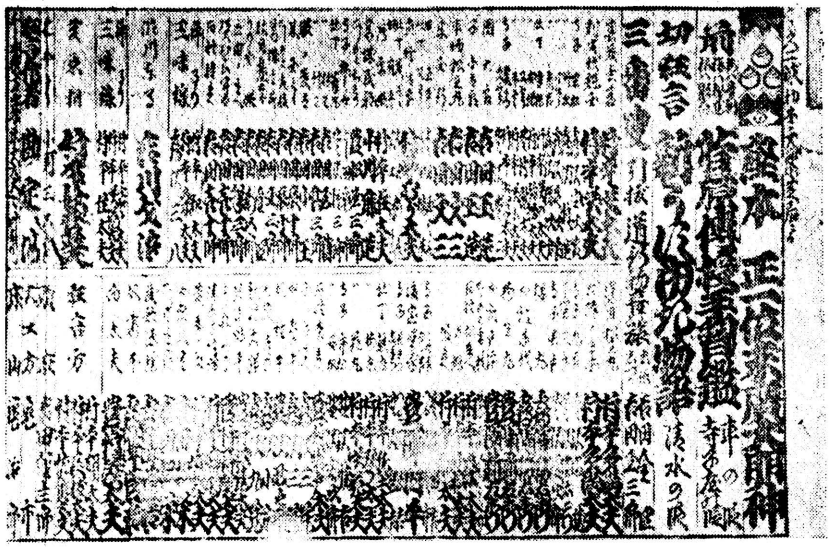
近松半二の歿年は、まづ「名人忌辰錄」（關根只誠編）には「天明寅年二月某日、山科にて歿す、歳五十八」とあり、「淨瑠璃史」（高野辰之氏著）には、天明三年の條に「二月、近松半二歿、五十九歳」と記され、また「戯曲小說通誌」（雙木園主人編）には「天明三年二月四日、享年九（五の誤か）十九歳を以て歿す」とある。之等の書は何を典據にして記されたものか明かでないが、その後に刊行された「近世邦樂年表」（義太夫節之部・黑木勘藏編成）や「淨瑠璃名作集」（日本名

著全集・黒木勘藏解題）には、天明三年二月五十九歳で歿したと記され、また「日本文學大辭典」（新潮社刊）所收の「近松半二」（守隨　氏執筆）條には「天明三年二月四日歿す、享年五十九」とあるところから考へると、恐らく上記の三書らに據つて記したものと見られる。而も之等の記事に、彼が作として何の疑問も、註もなしに、天明三年四月竹本座初演の「伊賀越道中雙六」を擧げてゐる。これは彼が生前の作と見なしてゐるのであらうが、正本や番附にはさうした記事も見えない。「劇代集」（二代櫻田左交編）によれば、當時彼はまだ健在であり、「其後病身となり」、そのため「山科に閑居し」たらしく、「天明七年歿す」とある。而して彼が遺稿「獨判斷（ひとりさばき）」は追善と辭世にかへて疎懶堂と紀上太郎とが「梓に刻、同好の人々へ配りし書」であつた。同書の敍に彼が傳もあるので、詳しくは同書について見られたい。今日に於ては半二が墓も知るよしがないやうに思ふが、天明七年歿といふ說が私は正しいと思ふ。

かく觀てこそ「伊賀越」の上演も無論、生前のことであつたらうし、「京攝戲作者考」（木村默翁編）の近松半二條に「天明丁未（七）の年歿すと云」とあるのも符合するからである。その他、彼を天明七年歿としたものに「中興世話早見年代記」（西澤一鳳編）・「晴翁漫筆」（近松半二條參照）等がある。たゞ之等に享年の記載のないことは遺憾である。もし推定が許されるならば、六十三歳前後でなからうかと考へられる。

文樂芝居とある番附

「文樂座」といふ座名は、明治五年正月松島文樂座開場以來であることは、「上方」第壹百貳拾壹號（文樂號・昭和十六年一月刊）所收の「文樂座の沿革」の中に述べておいたが、それでは、その前には文樂座を何んと呼んだかといふことである。番附には場所に因んで「稻荷社內東芝居」・「稻荷社內東小家」・「いなり社內東」・「稻荷社（境）內」等、記してあるが、文樂又は文樂軒の經營した芝居であつたゆゑに、俗に「文樂の芝居」（一時、文樂軒の芝居）と呼ばれたといふ。これは屢々同芝居の番附に「文樂茶店」（稀れに「稻荷東の芝居境內文樂軒茶店」）などの罎肉の印を捺してあることからも斷ぜられ（新築地淸水町濱小家時代にも文樂茶店の捺印がある）、また「金屋新兵衛一代記」（六代目竹本染太夫自叙傳）天保十年七月の條「竹本梶太夫文樂盆芝居に水中出語りの事」などあるによつても明かである。しからば「文樂芝居」と刻した番附もあつて然るべきものと思つてゐたところ、數年前に私が蒐集した番附の中にそれを發見して的中したことを喜んだことがあつた。江湖博雅の中には、既に御承知の方もあらうと思へるが、初見の方への參考までその一つを茲に挿入して示した次第である。



附番あるもの「文樂芝居」午初戌二久文

番附に年號の明記ある如く文久二年のもので、初午の稲荷祭に餘興として太夫・三絃・人形方が「菅原」・「薄雪」等の芝居を演じてゐるのは興味が深い。詳しくは挿入の番附について見られたく、特に「文樂芝居」とあるのに注目せられたい

操り・歌舞伎合併の顔見世

子供芝居でなく、首振り芝居でもなくて、操り淨瑠璃と歌舞伎芝居とが一座して顔見世興行をしたのは、私藏の番附では寶暦十年京都亀谷粂之丞座（中芝居）のが古いが、大芝居としては次に示すものより外に私は知らない。それは天明八年十月（十九日初日）大阪北之新地芝居（座本坂東岩吉）で行はれたもので、既にこの役者附（面附）だけは「南水漫遊」に「蓬萊山御慶顔見世」として記錄されたところであるが、全く面附に過ぎないので、私藏の番附によつて役割番附の方を掲げて參考に供しよう。初めに座本の定紋（檜紋）を置きその下に座本坂東岩吉と大きくあり、次に顔見世の大名題（大外題）が左の如くある。

難有北神德烏帽子折　上中下
三通物

盆狂言より居形の役者を
綱に此度又改て
三十郎にあたる
金作の吉田冠子

右のカタリのうち、「三十郎」に「こた」と振り假名を附

たいこ持　吉田吉三郎
黒谷惠長　吉田千五郎
買使市助　豊松定藏
黒谷方丈　豊松吉三郎
吉田や喜左衛門　吉田新吾
吉田や女房　吉田三吾
あハ大じん　吉田文藏
ふぢや伊左衛門　吉田文吾
扇や夕ぎり　吉田文三郎
浄瑠利　竹本君太夫
浄瑠利　竹本美和太夫
浄瑠利　竹本富太夫
三味線　鶴澤時藏
狂言作者　藤川比良
狂言作者　並木伊織
狂言作者　竹本三郎兵衛

千秋萬歳樂叶

こしもと　市山梅之松
同　小笹　坂東吉松
同　しま笹　嵐文吉
京のきみ　花桐富三郎
しのぶ　藤井花咲
侍從太郎女房　浅尾富三郎
侍從太郎　中村宗十郎
おわさ　三桝徳三郎
武藏坊辨慶　山村儀右衛門
馬かた　ほた六　市山梅八
同　幸七　市山金市
同　ぼん八　中村熊吉
牛飼助八　花桐富三郎
こしもとくれ竹　藤井花咲
牛飼ぎう藏　嵐三津五郎
久野谷金藤太　坂東岩右衛門
まさごのまへ　浅尾富三郎
里の子時五郎　山村友右衛門
みだいひげの井御前　坂東岩五郎
小ぬかの三藏　關山十郎
ゑぼし折つかさ　山下金作

頭取　村山平十郎

けたのは、この時スケに加入した關山（三とも書く）十郎の俳名「小太」（こた）を附けたもの。また吉田冠子とあるは二代吉田文三郎のことである。狂言は（御所櫻堀川夜討）「辨慶上使」と「女烏帽子折」と「廓文章」（増補）の三種。配役・浄瑠璃・作者等を番附そのまゝを示すと上記の通りである。

この配役でも知られる通り、操りは「廓文章」だけであるが、操り・歌舞伎いづれも職分を守つてゐる。但し浄瑠璃・三絃は共通かとも思はれるが、チョボの名手竹本富太夫が見えるので、よし共通だつたにしても、それぞれの助演に過ぎなかつたと思はれる。この記錄は「近世邦樂年表」にも漏れてゐるが、特に注意すべきことは「廓文章」の上演である。「聲曲類纂補遺」によると、安永九年成るとあるが、初めて上場された年月・作者なども明かでない而し私が蒐集した番附の中では（廓文

章は）この時のが最古であり、夕霧を二代文三郎、伊左衛門を文吾が遺つてゐるのも、さこそと偲ばれる。但し操りでの初演はこの以前かに思はれるが、安永九年成立したのには、同年二月（九日初日）大阪角の芝居（座本芳澤いろは）で、宮薗節で上演した「今様夕霧卷」（作詞並木十輔）と關係あるらしく考へられる。

首振り芝居史料斷片

首振り芝居、即ち身振り狂言は、京都で「肉あやつり」大阪で「チンコ芝居」などとも呼ばれた。この芝居は操りの人形の代りに子供役者をつかひ、役者は淨瑠璃につれて、臺詞なしの身振りのみを演ずるもので、操淨瑠璃の一變態である我が近世演劇史上に於ける操淨瑠璃と歌舞伎芝居との極めて錯綜した競爭と妥協との一局面を示すものと觀られる。恐らく竹田機關（或は首かけ芝居）に胚胎するものであらうからその由來も竹田の子供芝居と考へられる。然るに「攝陽奇觀」天明八年の條に「五月、チンコ首振り狂言初む。首ふり狂言といふ事、京都にては先年より興行致す事に而、是を肉アヤツリ共いへり。今年竹本政太夫思ひ立て歌舞伎役者の子供十歳前後を聚め、堀江此太夫芝居にて興行なし大當り、同七月道頓堀東の芝居へ引越す。夫より追々首ふり芝居繁昌にて座摩・稲荷の宮地にて打續き興行し、大阪にてはチンコ芝居といふ。（近世にては中ウちんこ、豆ちんこなどと年の甲乙に依て、その群れ分れり）」とあり、當時刊行された評判記「役者髻子」を掲げてゐる。また「南水漫遊拾遺」（五の卷）頓阿雜事天明年間の條に「同八年甲の夏珍らしくも堀江市の側此太夫芝居にて、座元淺尾爲吉を初め、十歳前後のおさな子許りを集め、淨瑠璃に合せ人形の身振をうつさせ、一口もせりふをいはさず不殘太夫より語り、道具建もあやつり仕立にして町中一統に沙汰よく、夫より道頓堀若太夫芝居へ引越、七月一日より興行、猶々評判よく日增の大入にて、役者うない子と云評書出る」とあつて、評書の役者連名を掲げてゐる之等の記事によると、大阪ではこの時が首振り狂言の權輿の如く聞え、京都では既に前方行はれてゐたとあるが、年代のほどは明示がない。

私藏の番附では明和五年正月大阪竹田芝居（細工人竹田近江大掾）で、左の狂言と子供役者で興行したのが古い。

「古今三島新梅若物語」隅田川の段、人市の段
「東鑑御狩卷」三の口、三の詰
「式三番古實聖入」物狂の段、三番叟の段
「平惟茂凱陣紅葉」四段目、曲水の段
竹田伊八（後の二代中山文七）・同太藏（後の中山他藏）・同善吉（後の江戸坂善吉）・同力藏・同市松・同萬藏・同與吉・同伊之助・同治郎吉（後の三枡次郎吉）・同藤藏・同萬吉・同平藏・同仁三郎・同友九

郎・同一德・同他四郎（後の淺尾工左衛門）・萩野仙次郎・嵐吉次郎・同金藏・玉川倉藏・同みやこ・山科槌五郎（山科新五郎の二男）・同甚吉（同上の長男）等。

この興行は明和五年三月刊の「役者言葉花」にも附錄の中に收められ、その記事に「此度も幼少の子供故、淨るりに合せ、人形仕方身ぶり仕候云々」とあつて、身振り狂言であることを證明してゐるが、この前に於ても既に行はれてゐることが判る。

京都の番附で、寛延二年十一月（二十二日初日）四條南側芝居（座本水木吉三郎代布袋屋梅之亟）で、若立役をまじへて子供操り芝居の顏見世興行をしたものがあるが、番附面のみでは首振り芝居か、子供操狂言か、一寸明瞭でない。ともかくそれを記さう狂言は同年十一月豐竹座で初演された「十帖源氏物ぐさ太郎」その他で、「物ぐさ」の主な配役を示すと

物ぐさ太郎　染川善藏　不破伴左衛門　淺尾元藏（淺尾元五郎の弟）
金魚屋金八　小野川辨彌　〔長谷部雲谷門兵衛（後の二代藤川半三郎）　山本七三郎
〔久吉草履取岡平　中山龜松　狩野雅樂之介　小倉山千太郎（後の二代中村十藏）
左近之進　中村吉彌　〔石塚玄蕃庄屋壽良作　生島十四郎（初代十四郎の子）
名古屋山三　水木吉三郎　佐々木義賢　瀧川藤吉
佐々木彈正　山下又三郎　犬上團八　水木吉藏
利休女房楊　上村新太郎　金魚屋女房　嵐八重三
御國御前　山下吉三郎　葛城　菊川常次郎
娘小枝　藤岡小吉　なでしこ　佐野川辨藏

その他子供は尾上富菊・同秀五郎（以上尾上菊五郎弟子）・中山若松同辰之助・同藤藏（以上中山新十郎弟子）・水木吉松（水木吉三郎弟子）・同春次郎・同市松（以上二代水木辰之助弟子）・佐野川伊勢松・同藤江（以上佐野川十吉弟子）同亀市（佐野川萬菊弟子）・大谷才藏（初代大谷廣次の子）・大島門之介（大島九十郎弟子）小倉山定四郎・同喜代太郎（以上小倉山千太郎弟子）・中村文吉（中村富十郎弟子）等で、淨瑠璃太夫は豐竹桐太夫・竹本湊太夫・同音太夫・同卯太夫・同島太夫等。「役者新詠合」（寛延三年正月刊）の評によると「よく人形の身ぶりをうつされて、きよう〳〵」（生島十四郎條）「身ぶりの段よし」（藤岡小吉條）などとあり、好評で「大入」と記されてゐる。この評に見れば、後の身振り狂言、即ち首振り芝居かに思はれるが、なほ後日の研究に俟たう。いづれにしても淨瑠璃操り全盛期たる寶暦期（遲くも明和初年まで）に行はれてゐたことは事實であるが、後世の首振り芝居流行の端緒となつたのは前出「擇陽奇觀」に說く如くであらう。而もその先蹤は天明八年より前の天明五年二月（十一日初日）堀江市の側芝居（座本淺尾爲吉代名代豐竹此太夫）で興行された首振り芝居であ

往昔模様龜山染

七ッ目　豊竹杣太夫
八ッ目　豊竹淀太夫
　　京豊竹君太夫
　　田がたり

やっこそで平　浅尾奥治郎
岩井兵介　坂田亀蔵
赤ぼし水右衛門　浅尾友蔵
百姓五作　柏井東四郎
いへぬし　中村徳治郎
岩井半次郎　嵐卯之助
山わけ天平　浅尾友蔵
岩井源之亟　嵐徳之助
後家白あや　花桐徳三郎

妹背山婦女庭訓

道行　豊竹磯太夫
　　竹本菅太夫
　　竹本關太夫

入鹿大臣　坂田亀蔵
仕丁　谷繁治郎
もみぢの局　中村徳治郎
さくらの局　柏井東四郎
とうふ買　藤川岩松
あらまき彌藤二　嵐乙吉
宮こし玄蕃　浅尾友蔵
たちばな姫　澤村亀松
おみわ　嵐徳之助
ふか七　尾上音吉
もとめ　浅尾奥治郎

四ッ切　豊竹杣太夫
　　竹本關太夫
　　江戸竹本菅太夫

傾城阿古屋の松

二の口　豊竹君太夫
二の切　竹本關太夫
　　豊竹磯太夫

すけの局　豊松半治郎
仲人佐平治　柏井東四郎
伴そう　嵐伊之助
さいねんじ　藤川岩松
かぢはら平二　嵐乙吉
藤太はゝ　中山源治郎

つたので、その番附を参考までに示さう。

花桐德三郎は二代花桐豊松の二男、浅尾奥治郎は初代浅尾爲十郎の子で、後の二代爲十郎である。浅尾友藏は初代爲十郎の門弟で、後に奥山、更に三代爲十郎を襲名した。藤川岩松は初代藤川岩松の子で、後に山村友五郎と改め、振附師に轉じたが、更に山村吾斗、山村舞扇齋と稱し、舞踊山村流の祖である。坂田亀藏は坂田助五郎の子、柏井東四郎は柏井森藏の孫、豊松半治郎は豊松半三郎の子、澤村亀松は澤村吉松の門弟、嵐德之助は二代嵐三五郎の門弟、嵐卯之助は嵐金藏の門弟である また作者の近松正三は二代並木正三の別名である。

この首振り芝居が好評なために、道頓堀の若太夫芝居に引越して興行したが、「梅玉餘響」（天保九年刊）に傳へるところに據ると、加賀屋福之助（後の三代中村歌右衛門）がこの時の「國性爺合

國性爺合戰		
三ノ口	豐竹淀太夫 竹本菅太夫	おこと　尾上晉吉 下人　北六　嵐德之助 もり久　花桐德三郎 塩やき藤太　淺尾奥治郎
三ノ切	豐竹賴太夫	下くわん　嵐卯之助 下くわん　嵐伊之助 こしもと　嵐小千代 こしもと　豐松半治郎
三味線	鶴澤正藏 鶴澤吉藏 竹澤平治郎 鶴澤時藏	ばゝ　澤村亀松 ばゝ　澤村亀松 ら一　坂田亀藏 和藤内　淺尾友藏 きんせう女　花桐德三郎 かんき　淺尾奥治郎 ごさんけい　座本淺尾爲吉
ふり附　坂田助五郎		後見頭取　嵐紋太郎
作者　近松正三		

戰」三段目を觀て、急にこの一座へ出てみたくなり、遂に次ぎの替り狂言（廿四孝三段目・伊勢物語等）に出演したといふ動機をつくつた芝居なのであつた。

首振り芝居は子供役者の修行機關として名門の子弟も進んで出演し、加賀屋福之助、即ち後の三代中村歌右衛門を始め幾多の腕達者の名優を產んでゐる點からも、如何に重要視されたかは茲に說くまでもなからう。また評判記や番附に屢々散見する子供あやつり狂言との關係については項を改めて述べるであらう。

附けていふ。木谷蓬吟氏著「文樂今昔譚」の「子供首振り芝居の流行」の條に、享保十六年六月豐竹座所演の「酒呑童子枕言葉」の幕間に、間の物として出語された太夫豐竹左近ワキ豐竹右近・三絃野澤文二郎を以て、「どうやらこゝらが子供首振芝居の始めであるらしい」と、述べられてゐるのはどうであらうか。これは子供淨瑠璃に配するに、子供人形遣か、單に子供淨瑠璃のみの、いづれかであらう。

▽　△